

琉球大学学術リポジトリ

慢性腎臓病における尿中アンジオテンシノーゲンと腎細動脈リモデリングとの関連

メタデータ	言語: English 出版者: 琉球大学 公開日: 2022-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): arteriolar remodeling, chronic kidney diseases, renal renin-angiotensin system 作成者: 金光, 崇史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002019520

(別紙様式第7号)

論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	金光 崇史
論文審査委員	審査日	令和4年1月12日	
	主査教授	植田 真一	
	副査教授	古泉 英貴	
	副査教授	斎藤 誠一	
(論文題目)			
Association of Urinary Angiotensinogen with Renal Arteriolar Remodeling in Chronic Kidney Disease			
(慢性腎臓病における尿中アンジオテンシノーゲンと腎細動脈リモデリングとの関連)			
(論文審査結果の要旨)			
1. 研究の背景と目的			
慢性腎臓病 (CKD) において腎細動脈硬化による糸球体高血圧、糸球体虚血により腎障害進展が惹起される。細動脈リモデリングは、一般的に高血圧症患者において多く認められるが、レニン-アンジオテンシン系 (RAS) もまた細動脈リモデリングに重要な役割を果たすことが示唆されている。今回の研究では今までに解明されていない腎臓局所の RAS と腎細動脈リモデリングとの関連について検討した。			
2. 研究方法と結果			
対象は2010年6月1日から2013年3月31日の間に当科で腎生検が施行された患者172名で、RAS阻害薬を内服している患者や血管炎の患者などを除外した54名である。一般的な臨床所見に加えて酸化ストレスマーカー、腎内RASの有用なバイオマーカーとなる尿中アンジオテンシノーゲン (UAGT) を測定し、細動脈リモデリングの指標となる Wall to lumen ratio (WLR) を計算した。WLRは病理組織標本より細動脈外径と細動脈内腔径の差を細動脈内腔径で割ったもので計算した。WLRに関連する因子について重回帰分析を行い検討した。さらに最も症例の多かったIgA腎症の患者においてUAGTとWLRとの関連に加えて、腎内RASの臨床的意義を明らかにするためにUAGTとeGFRの変化率との関連を検討した。			
結果は、年齢、血圧、eGFR、WLRの中央値はそれぞれ37歳、120/73mmHg、85mL/min/1.73m ² 、0.93であった。Ln(UAGT)は、腎障害の古典的因子・非古典的因子で補正し重回帰分析を行ったところLn(WLR)と有意に正に相関していた($\beta=0.28$ 、 $p=0.03$)。IgA腎症の患者に限定した解析では交絡因子で補正してもLn(UAGT)とLn(WLR)は有意に相関しており($\beta=0.37$ 、 $p=0.04$)、Ln(UAGT)は交絡因子で補正したところ中央値8.7年の期間でeGFRの変化率と相関する傾向を認めた($\beta=-0.38$ 、 $p=0.05$)。			
3. 研究の意義と学術水準			
CKD患者において併存疾患とは独立して腎内RASが腎細動脈リモデリングと関連することが示唆され、ベースラインのUAGTが腎機能障害進展と関連することが示唆された。非侵襲的な尿検査によりCKDの病態を評価する手がかりとなり、臨床的に意義があると考えられる。以上の結果より、本論文は学位授与に十分値するものと判断した。			

備考 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。

2 要旨は800字~1200字以内にまとめること。

3 *印は記入しないこと。

令和 4 年 2 月 14 日

(別紙様式第 8 号)

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

報 告 番 号	*課程博第	号	氏 名	金光 崇史
論 文 審 査 委 員	審 査 日	令 和	4 年 1 月 12 日	
	主 査 教 授		植 田 真 一 印	印
	副 査 教 授		古 泉 英 貴	印
	副 査 教 授		斎 藤 誠 一	印
<p>(最終試験結果の要旨)</p> <p>大学院博士課程の最終試験は口頭による公開討論によって行い、以下の点について確認した。</p> <ul style="list-style-type: none">① 提出論文について内容と意義を十分に把握していること② 研究の目的と方法を熟知していること③ 研究結果を正しく理解していること④ 研究に関連する文献をよく把握していること⑤ 研究結果の展望について明確な見識を有していること <p>審査の結果、上記について十分な回答が得られたため、本学大学院博士課程を修了するに値すると判断し、最終試験を合格とした。</p>				

備 考 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書とすること。

2 *印は記入しないこと。